

20 14年

第26回
戦争体験を語り継ぐ集い
戦時体験記録集《第21集》

★千人針 幅Ⅱタオルほど★長さⅡお腹に巻く★目的Ⅱ弾丸除けのまじない。
白地の木綿布に千人の女性が1人1針、赤糸で結び玉を縫いつけ千の結び玉
で完成。虎は千里行って帰るに倣い、虎年女性は年齢数結び玉を進呈できる
ので、千支を隠し1玉。5銭は4銭Ⅱシセン（死線）を越える語呂合わせで
5銭玉を千人針に縫いつけた。千人針は『風』の格好の棲み家になった。



ところ 緑生涯学習センター
月・日 平成26年7月26日
戦争体験を語り継ぐ集い実行委員会

世界の宝が倒れそうです 平和の象徴鳩も撃たれ地に……
 — 発刊の言葉 —

今！必要なのは！復元力！

日本国憲法
 第2章
 第9条

① 戦争の放棄

日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に実現し、国家権力の発動たる又

②

戦争を武力の行使による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを認めない。これを保持しないことを認める。

目次

レジュメ・有松の戦中・戦後	語部 福岡 友一	1 頁
レジュメ・お母さん	語部 伊藤 芳雄	2 頁
レジュメ・シベリアへ	父の墓を探しに 語部 小林 靖	3 頁
レジュメ・杉原千畝『命のヒザ』	語部 小島 久志	4 頁
読書感想文		
”あの日、広島”を読んで	高木 詩乃	5 頁
読書感想文		
”ピカドン”を読んで	高木 葉月	6 頁
記憶と戦争	内藤はるの	7 頁
新聞記事（提供）		
悲惨な戦場100歳「語部」	上野 三郎	8 頁
戦争で家族・家も奪われ	速水 民子	9 頁
昭和16年〜22年		
召集・敗戦・シベリア捕虜7年の記録	渡辺 敬止	1 頁
舞鶴引揚げ桧橋復原式で奇跡	橋詰 四郎	2 頁
”棄民のあしあと”	夏梅 誠一	2 頁

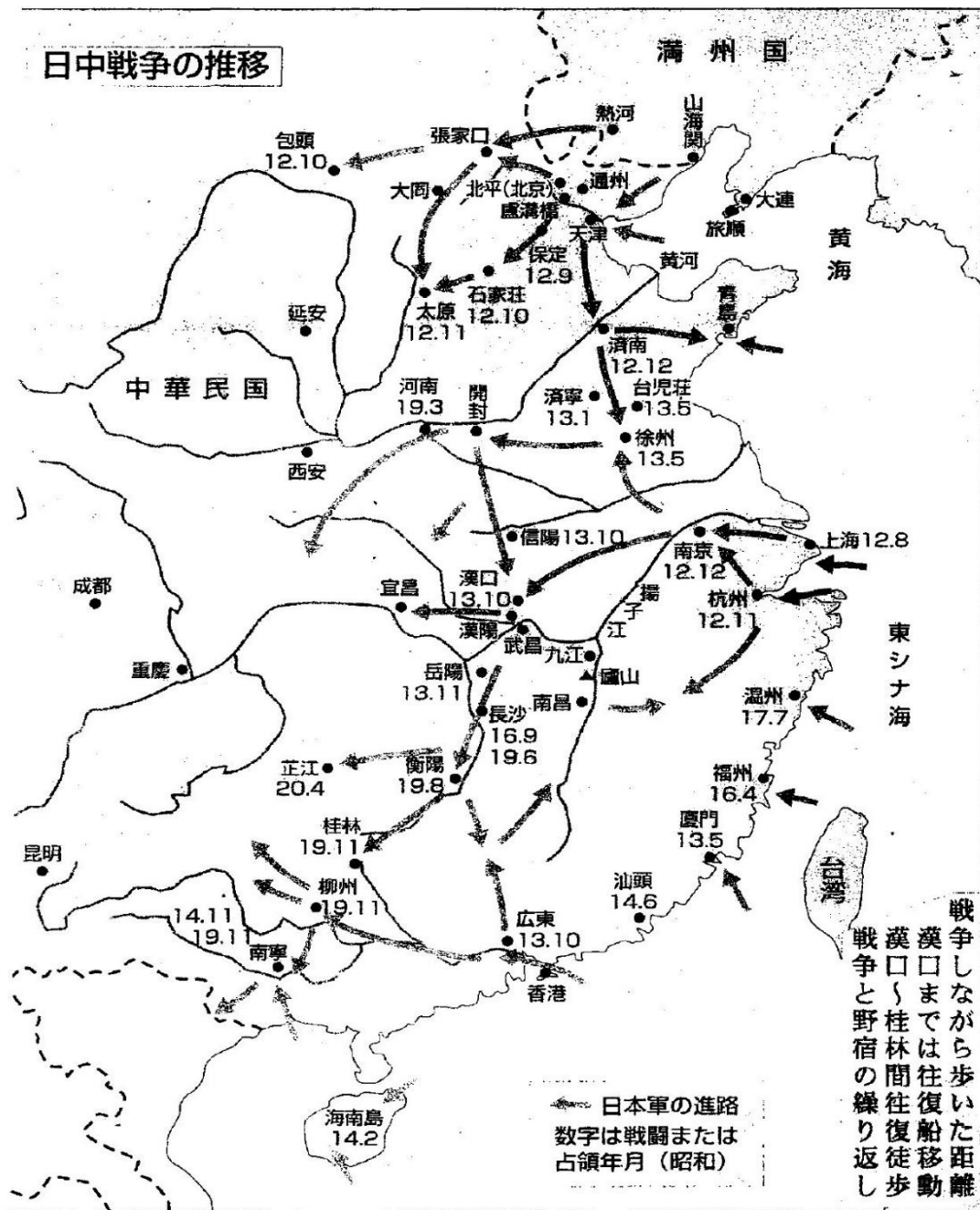


語部 福岡 友



収容人員数は敗戦日当日です

日中戦争の推移



私は19歳の昭和19(1944)年に軍隊に志願。中国南京郊外の砲兵部隊へ派兵。毎日の訓練は地獄でした。気候も風土も違い「水」を飲むと下痢です。薬を貰いに行くと「精神が弛んだ」とからと、鉄拳制裁。殴られ歯が折れたり、鼓膜が破れるので下痢を我慢して隠すのです。消灯前、少し時間があつたので入隊する時日本から持ってきた私物を整理していたら、お母さんが持たしてくれた小さい缶が出てきました。蓋をとるとメリケン粉でまぶした百草丸が一杯入っていました。

私は思わず「お母さんありがとう」と心の中で叫びました。お母さんが隠して持たしてくれた百草丸で下痢も治りました。我が子と思う母のありがたさに涙が出ました。この薬で生きて帰るぞと決心しました。

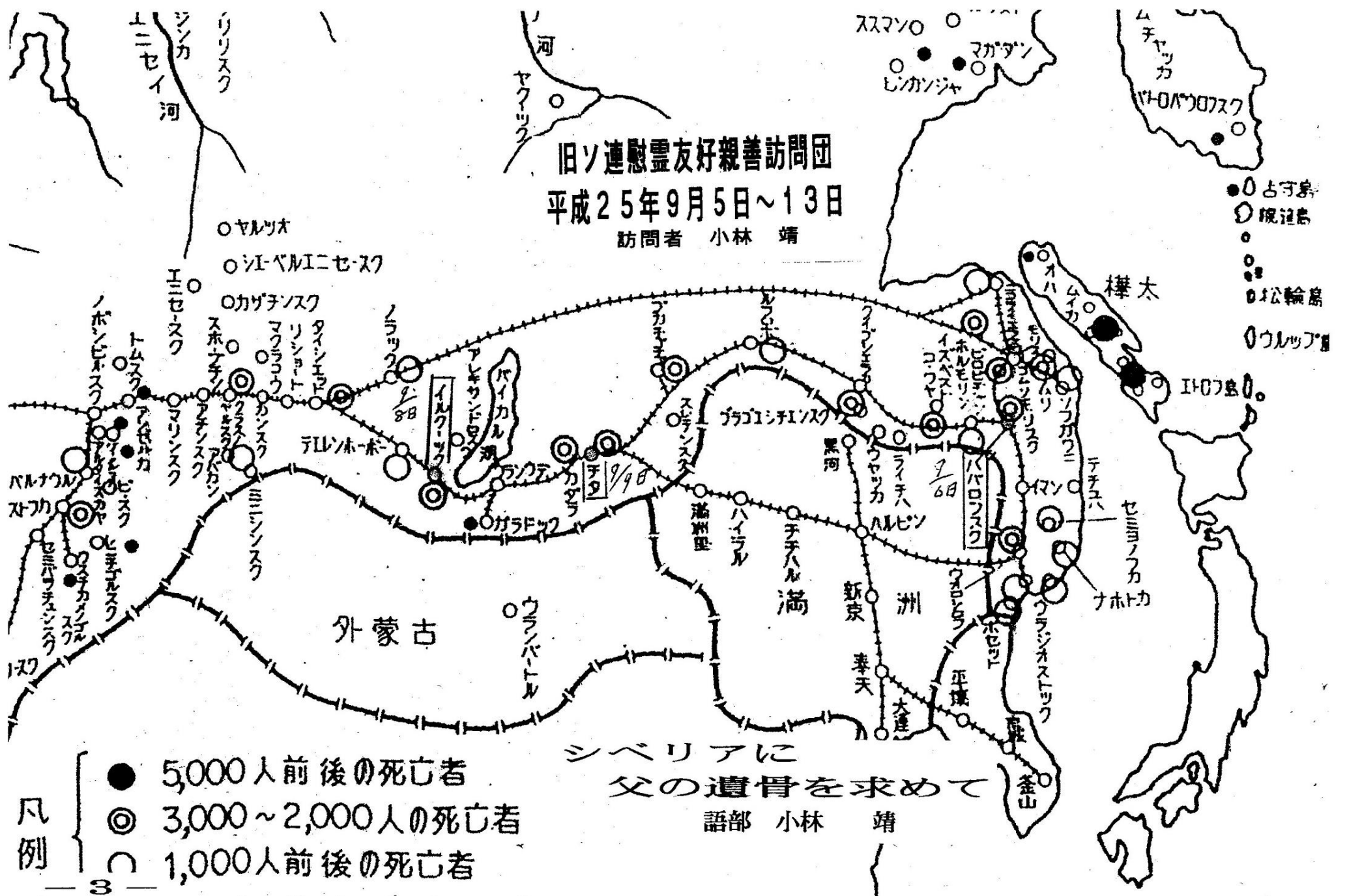
左の地図の漢口から桂林間、歩くのは夜。雨の夜も嵐の夜も歩いて野に寝て、土の上に寝て戦争をしました。大勢の兵隊が歩きながら、寝ている間にも死にました。私が生きて帰れたのは母に感謝、母のお陰です。

語部 伊藤 芳雄

旧ソ連慰霊友好親善訪問団

平成25年9月5日～13日

訪問者 小林 靖



杉原千畝『命のピザ』

語部 小島 久志

昨日7月25日は74年前の1940年にナチスの迫害を受け逃れてきたユダヤ人たちが、リトアニアのカウナス日本領事館に押しかけ、日本通過のピザを求めてきました。領事代理の杉原千畝は、ユダヤ人達の願いを聞き入れ、日本政府（外務省）の指示に従わず、ユダヤ人にピザを発給します。

ピザは手書きで、欲しい人は大勢なので、昼も夜も、食事もそこそことにして2000人以上のピザを書き続け、シベリア経由で日本の敦賀港に上陸のみちを開き、6000人以上の命を救いました。戦後、杉原千畝は外交官を罷免されましたが、国際社会から称讃され、千畝の出身地、岐阜県八百津町の「杉原千畝記念館」には、ユダヤ関係者の来館が増えております。

ユダヤ人に対するナチス・ドイツの迫害は、ドイツ占領下のポーランドをはじめ、ナチス・ドイツの影響力が強い地域から逃れてくるユダヤ人の扱いが国際問題になっていました。ヨーロッパから日本経由でアメリカに渡るユダヤ人難民が、横浜港出港の鎌倉丸や氷川丸に乗船したとの資料も残されています。ホロコーストでのユダヤ人大量殺戮の実体も明らかにされました。

杉原千畝、明治33（昭和61（1900）～1986）年。

八百津町で幼少年期。父の仕事の都合で三重県や名古屋で生活。愛知県立第五中学校卒業。大正8（1919）年早稲田大学中隊。ハルピンに留学。外交官としてフィンランド国ヘルシンキ公使館勤務を経て、ニトアニア国カナウス領事館開設に携わる。

※参考文献

「へいわのための名言集」早乙女勝元編 大和書房2012/8/15発行
『知っていましたか？近代日本のこんな歴史 杉原千畝と「命のピザ」』国立公文書館アジア歴史資料センター

杉原千畝記念館

〒505-10301 岐阜県賀茂郡八百津町1071

休館日 毎週月曜日・年末年始（祝日または振替休日の場合は翌日）

開館時間 9時30分～17時まで

入館料金 個人 高校生以上300円 小中学生100円

団体（20人以上） 高校生以上200円 小中学生 50円

記念館に対する問合せ

八百津町役場 ☎0574-431211

FAX 0574-4310969

”あの日、広島” を 読んで

小五 高木 詩乃

私がこの本をえらんだ理由は、夏休みにみんなで「みどり学習センター」へ戦争の話を聞きに行った時に、こんなひさんなことはもうやめてほしい。このことをみんなに分かってほしかったので、えらびました。

本を読んでみると、写真家の人がいろいろなところで、傷ついた人や、町などを写していました。中には、亡くなっている人や、黒こげになっている人もいました。私は傷ついた人などを見て、目をそらしたくなりました。

本の中には、「こんなことは、あってはいけません。これから見せる写真は戦争時の写真です。目をそらしたくなるところもあると思いますが、決して目をそらさないで下さい。」と書いてありましたが、とても私にはできませんでした。本の写真は白黒でしたが、その戦争のこわさがとてもよくわかりました。

戦争では爆だんが使われていて、何十個もの爆だんが空からふってきました。その爆だんで多くの人々が命を落としました。私はそのことを知って、とてもかわいそうだと思いました。

なので私は、戦争はぜったいにやってほしくないと思います。

戦争では、原子爆だんが使われました。原子爆だんとは、放射能をふくむ爆だんです。たった一発の爆だんで、何十万人もの人が命を落としました。

原子爆だんによって街が焼け、いたるところに死体ごろがっていました。中には、目のとれてしまった人や、やけどで皮ふがめくれて、たれさがった人もいました。

今までも世界中には、核爆だんがあるといわれていますが、もう二度と爆だんがおとされてはいけなと思います。

武器なんか使わず、話し合うことが大切だと思います。

「ピカドン」を読んで

小六 高木 葉月

私しが選んだ本は、「ピカドン」という本です。ピカドンは戦争のお話です。なぜ、私はピカドンを選んだかというと、7月に「緑生涯学習センター」で、実際に戦争を体験した人から戦争のお話を聞いて、戦争に関心を持ったからです。

1945年8月6日に広島に、8月9日には、長崎に原爆が落とされました。原爆とは、原子爆弾のことです。原爆は、放射能をふくんでいて、表面の温度は5千度もあったそうです。その爆弾で何の罪もない30数万人もの人がいっしゅんの内に、殺されたのです。原爆のいっしゅんの光りで家が吹き飛ばされ、羽の焼けた「つばめ」は空を飛べなくなり、まわりは一面の火の海。全身大やけどをおい、指の先から皮ふが垂れ下っている人が、大勢水を求めて、川に飛び込んだそうです。

私はこの本を読むまで、戦争は2組の敵が互いに撃ち合って、人を殺したりするのだと思っていました。でもこの本を読むと、爆弾が空から降ってきて、何の罪もない子どもも殺すのだと分かりました。私は飛行機が飛んでいても、「あー飛んでるなー」としか思わなけれど、戦争を体験した人は、飛行機が飛んでくるとこわくて、とてもおびえていたと思います。

私は戦争でばらばにされ、会いたい人にも会えず、食べる物もない中で、ずっと苦しみながら生きている事がかわいそうだと思いました。もし自分がその場にいたら、そんな苦しい思いをしてまで生きようとは、思わないかも知れません。家もなく、家族とはなればなれになってしまったら、私はすぐに家族をさがしに行きたいです。でも、正直、自分も怪我をしているので、見つける自信はありません。

この戦争を生き抜いた人はすごいと思いました。戦争はもう二度としてほしくないです。戦争を二度と繰り返さないように、みんなが原爆の恐ろしさを、インターネットや戦争体験した人から話を聞いて、知ってもらいたいです。みんなに原爆の恐ろしさを忘れないでほしいです。

戦後68年たった今でも、戦争のショックで、言語障害や体に障がいをもった人、「がん」になった人もいます。なかには寐ている時に、寝言で叫んでいる人もいます。私はそれを聞いて、かわいそうだし、苦しみに耐えるなんて、とてもつらかったんだろうと、思いました。

私は戦争のことをもっと勉強して、次は私たちが戦争のひさんさを伝えることが今後、原爆をなくすことにつながると思っています。だから私は原爆について、もっと勉強していききたいと思いました。

記憶と戦争

地獄の底からのような響きで、また空襲警報のサイレンが鳴りました。私の家は働き手の3人の兄が戦争に行き、男は父だけで、あとは母と私達姉妹に義姉と子どもでした。

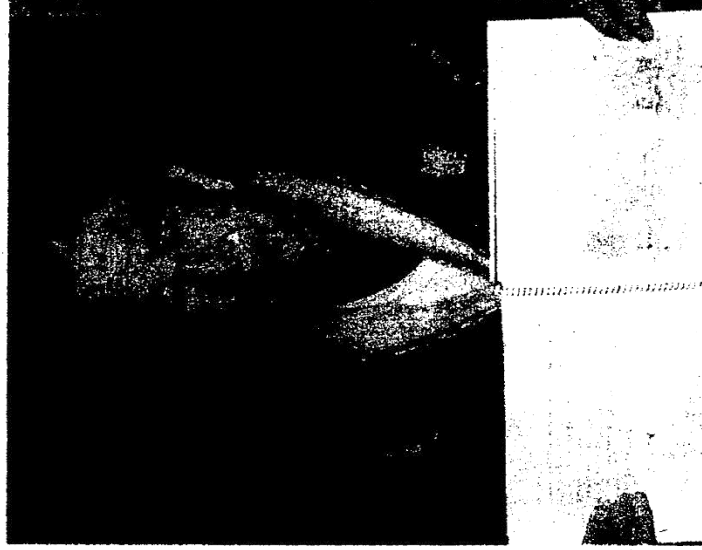
内藤はるの

空襲が盛んにあるので自己防衛で各家庭で防空壕を掘りました。庭のある家は屋外に、ない家は畳を剥がし床下に掘りました。セメントや材木など補強する材料は戦争に使われ、民間人には何もないので、畳一枚ほどの穴を掘り、家屋疎開で取り壊された家の畳を2枚を持ってきて、横に並べ穴を塞ぎ完成させました。私の家は庭に2人が屈んで入れるのを2カ所掘りました。

家屋疎開とは、駅、工場、役所の周囲の家を取り壊し、建築物のない広場にする目的を言います。住んでいる家族は自分で行き先を探して出ていきます。何の補償もありません。空襲から駅や工場、役所を守る「お国のため」です。空襲の来ない田舎で、屋根と壁があれば有り難いと、鶏小屋や家畜舎に住んだ人もいたほどです。

私と姉は「また来たか」と、寒いので蒲団にもぐっていました。父と母は同じ防空壕に。義姉は隣の防空壕へ子どもを抱いて避難しました。義姉に焼夷弾が当たり子どもを残して死にました。3人の兄も死にました。父と母は孫や、私達娘を育てるために、大変な苦労を致しました。国威宣揚、国と国民を豊かにする戦争だと言ったのに、国は滅び家族は殺されました。「喉元過ぎれば」で、又戦争で一儲けしようとする人達が増えてきました。私は絶対反対です。

悲慘な戦場100歳「語り部」



戦場での体験をかいたスケッチブックを手にする上野三郎さん＝天白区御幸山で

上野さんは福島県出身。場へ向かった。その途中三十歳だった一九四四(昭和十九)年夏、二度目の召雷攻撃を受けて沈没。海に集を受けてフィリピンの戦投げ出され死を覚悟した

太平洋戦争中、何度も死線をさまよった体験を「語り部」として子どもたちに伝えている百歳の男性がいる。天白区御幸山の上野三郎さん。戦後七十年近くだら、実際の戦場を知る人がどんどんいなくなる中、悲惨な体験をきちんと伝えるのが自分の使命だと思い、「戦争で人は惨めに死ぬだけ。二度と繰り返してはいけない」と訴える。

(北村剛史)

天白の上野さん 小中学校で体験伝える

が、偶然にも船に横たわったボートが流れてきた。め、九死に一生を得た。ミンタナオ島のサンボアングに移り、野蠻を築くなどして数カ月過ごした。四五年五月、所属部隊は米軍の攻撃を受けジャングルに敗走。追い込まれた揚げ句、敵陣への突撃命令が出たが、暗闇のジャングルを進むうち上野さんらは部隊からはぐれた。ジャングルでは蛇やカニ、芋のつるなどを食べて命をつないだ。多くの仲間が下痢や飢えで命を落とした。同年十月ごろに日本が負けたことを米軍機からまかれたことで知り、「撃ち殺されてもいい」と覚悟して米軍に投降。四六年二月に復員した。帰国して名古屋の企業に就職したが、長いこと妻にも戦場の体験は語らなかった。「つらい思い出を話す気にならなかった。多くの仲間が死に、自分が生き残

ったことへの後をめたこともあった」
転機は八十歳ぐらいのころ。奇跡的な自分の人生をあらためて振り返り、「やはり自分の子や孫に伝えておきたい」とスケッチブックに戦場の記憶を水彩画と文章でかいた。九十五歳のとき、新聞で知った「戦争と平和の資料館トースあいち」(名古屋)の語り部の活動に参加。年一度、市内外の小中学校に出向いて体験を話す。トースあいちには七十五人の語り部が登録しているが、上野さんは最高齢だ。上野さんの部隊は大半が二十代後半から三十代前半だった。多くの仲間が「小さな子どもを残してきたから絶対に生きて帰る」と言いながら死んだ。上野さんは「できる限り体験を話し、愚かな戦争の本当の姿を知ってほしい」と話している。

戦争で家族・家も奪われ

速水 民子

私の父は日中戦争に召集され戦病死。29歳で亡くなりました。その人生の8年間を、日本の軍隊と軍属で働くことで青春を費やしました。好きで志願したものではありません。天皇陛下のため、神の国日本のためにと強制され、富国強兵の明治憲法で20歳になると徴兵検査を受けることが義務付けられていたのです。父は自分の意志にかかわらず召集され、甲種合格で日本の軍隊に入りました。

父は、母や祖父母に、軍隊のことはほとんど話さなかったそうです。多分話せなかったのでしょう。その後、母から聞かされたことは、父は戦地から時々帰ってくると、毎夜夢にうなされ、飛び起きることが多かったそうです。無口で沈み込んで、何かを隠している様子で、とても苦しんでいたらしいこと。母は、可哀想でならなかったと言っていました。家には、いろいろな美しい勲章が沢山あったにもかかわらず、筆筒の奥にしまって、軍服につけることを嫌ったそうです。

父は「軍隊の話」は身内の者が聞いても、その時だけは答えなかったと言います。肺結核の病状が進んで、最後は陸軍病院を拒否し、自宅で息を引き取りました。最後を看取った母が言うには、「お父ちゃん、洗面器に一杯真赤な血を吐いて、ノド元を指差し、こころを包丁で突いてくれ」と何度も言ったそうです。そして最後に、枕元に家族みんなを呼び寄せ、「さよなら、さよなら、ありがとう」と、はっきり言った直後に息を引き取ったそうです。

父が亡くなった時、私は4歳、母は臨月でした。お腹には妹がいたのです。父を乗せたキンキン自動車（霊柩車）が八事の火葬場へ向かう時、二度も止まって動かなくなってしまうそうです。一家の大黒柱であった自分が、「年寄りと妻子を残して死ぬなんてイヤだ！」と云うメッセージだったのではないのでしょうか。亡くなった日は昭和15年9月14日でした。その後の日本の惨状を見ることもなく、旅立っていただけ救われたのかも知れません。

神の計らいは寸分の誤差もないと言われます。小学4年生の時の菅原先生の教えてくださった「天網恢々疎にして 漏らさず」は真理だと思っています。

私は苦しい人生ほど生き甲斐のある人生だと信じて疑いません。次々と家族を奪い、住む家を焼かれ、極貧を強いた戦争。祖父も祖母も、父も母も姉妹も、我が家族は戦争によって人生が大きく狂わされてしまいました。

戦争反対を唱えた人を国賊だ、非国民だといい、裁かれ、大半の日本人は御上のやることを信じて逆らわず、逆らえず、人殺しの侵略戦争に加担し、無謀な戦争を続けた愚かさを、今しっかりと見つめなければなりません。愚行を繰り返さないために、私たちは過去の過失をしっかりと見つめ直さねばなりません。そして、御上のやることに目を光らせていなければ、気がついたときは取り返しのつかないことになるに違いありません。

私の手元に2008年9月14日の朝刊がある。それには南京事件の息が止まるような残酷な写真が載せられている。「9月14日は父の命日である。戦争について何も語らなかった父が、母に、「戦争ほど罪なものはない。」と、一言だけ言ったそうだ。この朝日新聞の写真を見て、瞬間、無意識に私は父を探した。軍隊では、敵国の人間を多く殺すほど高い評価をされる仕組みですから、父が異例の昇進だったとすれば、より大量の殺人に加担したと云うことでしょうか？。胸が痛みます。

父が戦地で発病し、肺結核で吐血をして死に至った原因は、人間としての良心の呵責だったのではないかと思います。20歳で強制的に軍隊に組み込まれ、8年間も軍隊ひとすじ、わずかな期間だけ昭和区役所に勤め、鶴舞公園で学生に乗馬を教えていた時期もあったと聞いています。成人してからの人生の大半が戦争に関わっていたこと、父の弟から聞かされています。軍国主義の一番濃厚な時代でした。

「にんげんをかえせ」という原爆の詩がありますが、私も父に代って叫びたい。「父をかえせ。父の青春をかえせ」、4歳で父に死に別れた私にとっては、顔も覚えておりませんが、父と同じ思いで戦死した多くの人たちを、やりきれない思いで追悼しています。かれらの純粹な心意気、崇高さには敬意を表わしますが、そのように仕向けた国のやり方には激しい怒りを覚えます。そしてまた、国が同じ過ちを決して繰り返さないことを強く願っています。

（速水民子・遺稿集・今がいちばん幸せ）より

(1941年)

(1947年)

昭和16年(昭和22年)
召集↓敗戦↓捕虜

シベリアと7年間の記録

渡辺 敬止

現役は甲種合格。初年兵時代は怒鳴られ殴られ辛抱と我慢で、一選抜で上等兵になり名誉の満期除隊。大府で歯科医をしていた昭和16年赤紙召集令状が来て、王道楽土、五族協和みんな仲好し平和な満州国(関東軍)寒さを我慢したら命の保障は万全だとひとまず安心し、新京部隊を中心に各地を移動、階級は初年兵から「神様」と崇められている上等兵だ。現役の上等兵へ「貴様何年兵だ」と静かに言うだけで一目も二目も置かれる古兵なのだ。

職業柄、衛生兵にされ医務室勤務。営庭隅の焼却場で古いカルテを燃やしていたら、中隊長から「ご苦労さん」と「ねざらい」の言葉で「渡辺は歯科医の衛生兵」と知れ渡る。歯の治療は抜歯ばかり「液」はあるが「針」が少ないので同じ針を何度も使用し、消毒は念入りにしたので予後の感染皆無なのが自慢だった。

戦争も防戦が続き出動命令が出たが、私は「医系」でないので原隊へ戻されここでも医務室勤務に。本部のあるハルピンや新京の医務室勤務も拝命した。衛生兵も医務室勤務も解かれ、元の兵営勤務に戻ると上等兵殿と「殿」を付けて呼ばれ、上等兵の古兵ともなれば朝晩、上げ膳据え膳、何らの干渉もなく、これほど気楽なことはないと思うほどで、初年兵時代は地獄で早朝から夜遅くまで振り回され、娑婆でこれほど働らかされたら一財産間違いないと思うほどだったので、出来る限り初年兵には優しくしてあげた。

昭和19年頃、連隊本部付き乗馬小隊勤務。主に斥候、連絡の任務になり、訓練は裸馬で野外を乗り回し満人集落へ行っては休憩。軍隊から持出した軍手や甘味品と満人との物々交換を楽しんだり。満人の家はオンドル暖房、一室に数名の女性がいて、一人でも女性が多い家ほど良家とか。男子禁制で覗くと、無言で不安の眼差し、冬期は農業も出来ず、家の中に籠もっているだけでした。

軍隊の機密書類を私一人で、遠方の部隊へ届ける任務を与えられ、満州は親日平和と日本では宣伝して、実弾を装填した銃を携帯し

て出発。目的部隊への道も判らず方角だけで、地図も渡されず、大
体の方向へ向け馬を走らせる。裸馬訓練での遠出が役立ち、途中に
点在する満人集落へ立ちより道を尋ね、平原をひたすら走り、次の
集落で道を確認めては西部劇さながら、撃たれても当たらぬよう身
を屈め草原を走り、やっと辿り着いたと言うのが本音でした。

任務を終え案内された炊事で休憩中。「渡辺先生私です」と軍曹
が挨拶に来る。かつて歯を治療したことがあり、この炊事の責任者
だと。軍曹は部下にご馳走を作らせ歓待すると言うのだ。私も帰路
は往路の1/3の時間で行けると計算し、図太い古兵の貫禄が身に
ついていたのでお受けすることにした。炊事も衛生兵も軍隊は軽蔑
の眼差しなのだ、軍隊の一日はラッパで起床し、ラッパで消灯寝る
。食事も「炊事の野郎いいところ食べて俺等に残飯食わす」の歌詞
が付いたラッパなのだ。将軍が食べるようなご馳走なので、「食事
ラッパ」は本当だと錯覚しそうだ。衛生兵は「ヨーチン」と陰で呼
ばれ、傷はヨードチンキ・風邪はアスピリン・腹痛は胃腸薬だけで

※1銭5厘の俺等は馬以下に扱かわれていると言うのだ。
※1銭5厘II郵便葉書1枚の値段。貴様等は1銭5厘の葉書で集め
られるが「馬」は1頭何百円だぞ。と。馬は大切にされていた。

思いがなないことで超一級食のご馳走になり、帰路は理解してい
る道を快調に飛ばし時間を稼ぎ、少し疲れたので懇意にしている満
人宅へ寄り小休止。これも古兵の役得で当然と思っっている。一方私
の部隊では、帰りが遅く日も暮れ始めたので心配。狙撃されたかと
搜索隊を出す相談の処へ、ルンルン気分で元氣よく帰隊し、相手部
隊長からの親書を隊長に渡し任務完了。行きはオドオド帰りはウキ
ウキ。ご馳走になったことも、満人宅の休憩も秘密にした。

軍医殿がお呼と声がかかり出頭すると、私の乗馬技術と射撃を評
価して、遠方の部隊へ馬で往診する私を護衛してほしいと。命令で
なく相談されたので、1銭5厘でなく軍医と平等な接し方に対し快
諾し感謝される。軍医護衛は重大任務なのか、兵器係軍曹と衛兵司
令立ち合いで実弾を受取り、両者の目の前で実弾を銃に装填し残余
を弾倉へ収納する儀式に軍医は「嚴重な扱い」と驚嘆。軍医の前に
なり、後ろに回り、馬を自在に楽しく操る。果てしない草原は野花
の宝庫「芍薬」を王座に見渡す限り百花揺籃のお花畑だ。雪解けで
始まる草原の「野火」の壮大な美しさと合わせ、狭い日本では見る
ことの出来ぬ壮観さである。丘が近づけば駆け上がり双眼鏡で36

0度見渡し、軍医の馬の他「土埃」なしを確認と報告。軍医は私の命は同じ医者の君に守られていることを実感したと喜ばれる。私は口で「任務です」と答え、腹の中では「乗馬」を楽しんでいた。

満州は戦争もなく平和なので、訓練演習の他定期的に、中隊対抗の各種大会。勝者中隊は部隊長からお誉めの言葉を頂戴する栄誉ある一大イベントだ。射撃・銃剣術・柔道・相撲・短剣術・乗馬等で、関東軍の短剣術は返り返り血を浴びない必殺技と評価され、私は学生の頃柔道を学び短剣術では相手の剣を払い組み付き、内股、大外刈り、背倒等で倒しとどめを刺す。私の勝ちです。相撲も柔道の技で勝ち、柔道と乗馬は敵なし「柔ヨク剛ヲ制ス」の精神で、下級兵士や同年兵からも慕われていたようです。

昭和20年4月「極光」没収の動員が下った。関東軍は「極光」きよくこう」という銘柄の煙草を喫煙し、この煙草の空箱、吸殻で関東軍将兵の移動が判明するので、満州外への移動は防課上没収するのだ。日本本土も空襲の戦場に、満州以外は防戦の負け戦の修羅場なので「極光」没収動員はそれなりの覚悟をして出動した。行き先も教えられず貨車はひたすら南下、新義州を通過し釜山まで一直線なので、釜山から日本へ米軍本土上陸の防衛だと判る。釜山港埠頭は日本へ送る物資が山積。日本向け貨物船へ積み荷の使役もした中に砂糖の山を発見、奇しくも釜山駅駅長は知人の佐藤氏。これ幸いと軍隊の裏技も習得している古兵なので「砂糖」を手。大府へ送るよう頼む。これが私が日本の家族へ出した最後の便りでした。

私はこの埠頭で大変な場面を見てしまう。下積みみの兵隊の経験をしなくても、将校になれる学徒出身の見習士官が、父親のような兵隊を激しく殴り、押し倒し、土足で蹴り上げ散々な暴力を振るっているのです。私と同じ部隊の将校なら一発で私も含め古兵達の餌食にされる行為です。『戦場では後ろから鉄砲の弾が飛んでくる』とも言います。戦場でなくても私の知っている部隊で、明日満期になり満州から日本の家族へ帰る上等兵達が残る兵を集め「お前達には随分お世話になった。何もお礼は出来ないが、満期兵全員で相談して、それなりのお礼をさせて戴いた。遠慮なく受け取って戴きたい」と、何も置かず言葉だけ残して出発した翌日、近くの河から「暴力将校」が簀巻きにされ、死体で浮かび上がったのです。

釜山には本土決戦の兵隊達が集まり過ぎテントが宿舎でした。1

週間ほどで乗船と残留に別れ、乗船組は敵潜水艦に沈められても、玄界灘を泳いで帰ると喜び、残留組は日本に帰れないので悔しい思いをして再び貨車に乗せられ、行き先も知らされず幾日も後戻りの北上でした。昼到着。下車は暗くなる夜まで待ての命令です。

着いた処は「琿春」フンチュン」と言うロシア・北朝鮮の国境が地続きで集まる場所。昼は双方が望楼から望遠鏡で動向を監視しあい、日が暮れ暗くなつてから下車、兵舎に入り、笑つてはいけない。昼は外出禁止従つて軍隊なのに演習訓練ナシ。外を歩く時は、家陰や塀に沿つて忍者もどきでソ連から見えないように歩く。夜になれば朝鮮独立党の勇士がソ連側との交信に色とりどりの火花のような信号弾を打ち揚げる。武器弾薬は沖繩と九州へ送り、国境守備隊は武器もない丸裸で、代わりに丸太の大砲がソ連を睨んでいるのだ。暫くして在満の日本人が臨時動員され入隊してきた、武器も無いのに人員だけ増やす軍隊特有の「員数体質」の犠牲者と同情する。

地続きのソ満国境で擬似の大砲に枯れ草を乗せ、ソ連領に睨みを利かせているのを見て、日本負け近しと確信する。誰が言うともなく「日本は何でも爆弾で降参した」との噂が流れ、気が付くと部隊の将校が1人も姿を見せず消えていた。命令系統で上官が指揮する部下に悟られぬよう行方不明になっていた。日本軍は最高司令長官大元帥陛下の指揮下に置かれ、陛下は部下の将兵に「戦闘激烈にしてシ死傷続出し或いは紛戦を惹起し命令徹底せらば指揮官を失いたるも自己の携帯する武器を信頼し戦闘を続行すべし」と、降伏をせず戦えと命じているのに、突然指揮官が敵もいないのに敵前逃亡軍法裁判で銃殺を覚悟しての蒸発？か。残された兵は「携帯」する「武器」もないのです。

兵器庫の武器弾薬は根こそぎ本土決戦に向け送り空家同然。代わりと云つては変だが、衣料庫は新品軍衣が満載「武士は出陣に真新しい下帯」の故事に、気持ちだけでも習い全員新品に着替え、炊事で上等の食品から調理して食べる、命令系統喪失なので誰かが「全員同じになろう」と提案。同意して階級章を外す。ここで面白い体験をする。全員命令される側の集まりだ。しかも上官が「黒でも白」と言えば無条件で従うよう体質改造された人達で、命令（従わせる）も混乱させるばかりで、「自分のことは自分で」と心掛ける。

大勢入隊し在満の臨時兵の何人かが、残してきた家族に会いたい

一心で新品軍服を着て無断外出、途中、現地人に捕えられ丸裸にされ逃げ帰ってくる。馬に乗り家路に向かった者も、馬諸共も捕えられるなど兵の単独行は危険になったのだ。琿春は朝鮮独立党の拠点だとか。彼等は日本軍の小銃で武装し、自警団を組織していると噂も伝わってくる。我々は関東軍なのに鉄砲もないのだ。この有り様に私は「満洲を足場に大東亜共栄圏建設の野望は崩壊し終焉を迎えた。」と私なりの解説をしたが、炊事の食べ物が底をつき、馬を殺して食べる、誰が馬を殺すかの話題に掻き消される有り様だ。

兵営の近くを流れている川を小型の自動車に定員オーバーに乗ったソ連兵が米国製の小銃で武装し列をなして渡ってくるのだ。ソ連兵は発砲等の攻撃をせず、銃を高く挙げ大声で「通過」。指揮官も武器も持たない私達は「黙認」の有り様。ソ連軍が来てからも数週間命令も、どうなっている状況の情報も入手出来ないままの日々を過ごし、現地召集された兵や、朝鮮半島出身の兵は自分の判断で軍隊から離れ、私達の処の帝国陸軍は自ら崩壊した。

順番が来たのかソ連兵に集められ、ダバイ・ダバイの声でジャポン（日本）と言いながら、野営で数日間歩く。私達はウラジオストクから乗船帰国の希望で我慢して歩く。その内私達の持っている時計・万年筆・名刺サイズの鏡・爪切り等体中を触り略奪が始まり、両腕に何個も時計をつけいている者もいる。ソ連兵の持っている米国製の小銃は日本の単発銃とは比較にならない高性能。これでは日本は勝てないと思った。食事も米国製缶詰。ソ連兵は略奪した万年筆のインク補充や時計の見方も知らぬ者が多く、紙が無いのか板に書き。ナイフで削り再び書く、日本の「木簡」時代を想像させました。

ジャポン・ダモイ（日本に帰る）の声に急ぎ立てられて毎日毎日歩かされ、テントを張ったテント村ならぬテント街に驚くほどの捕虜が集められ、帰国させるどころか逆にソ連の各地へ送り込む基地だったのです。家畜輸送貨車に乗せられ、ハバロスクのような気もする駅も見ました。貨車では何を食べたかあまり記憶が薄れていますが、おそらく米国製の食料と、残っていた日本の食料であったと思います。

コムソモリスクの収容所に入れられ、食事は黒パンでした。黒パンは皆さんが想像する小麦の黒パンでなく、燕麦の粗悪パンといったところ。味は酸味が強く初めて口にしたとき「腐っている」

と捕虜全員が吐き出したほどです。始めて見たとき煉瓦と想像した、大きさは煉瓦の倍。頭のほうが黒く長さ1尺ぐらい、高さ5寸ほどです。広々とした広野の真中に周囲を有刺鉄線で囲まれ、四隅の望楼には24時間の監視塔です。丸太で組んだ粗末な建物、室内は2段式。広間は日夜ドラム缶で暖房の火を焚く様になっている。元々シベリアにはこのような建物が各所にあり、罪人を入れて重労働を科していましたが、この戦争で兵士にし空家になっているので私達捕虜を入れたのです。

収容所に入った頃には短い夏が終り、秋は無いので直ぐ酷寒・飢餓にさいなまれ、暗い内に起されソ連兵にダバイ・ダバイ（急げ急げ）と小銃で背中をこづかれ伐採の重労働。一抱えもある寒い国の松を地面も固く凍り滑る危険な足場で、2人で鋸を使い両方から切る。倒したい方向の下段に鉋で深く切り込む。思う方向に倒れず足を滑らしながら逃げる。倒した木の枝を打ち払い長さ7尺ぐらいに切り、決められた場所へ、決められた高さのノルマになるまで丸太を積み上げる。ノルマ不足組は居残りして達成するか、断念して帰り食事を減られるの二者択一を選ばされるのです。

監視兵は字も読も書けず、かけ算も出来ないのが多かった。彼等は1日中焚き火に当たり、退屈のあまり捕虜を呼びつけ「片足で立ってろ」と手真似で迫り楽しむ。犠牲にされた組は労働力低下でノルマ達成が国難になり、ソ連兵を憎まず矛先を「お前の油断」が原因と食事を減らされる争いに発展させられている。皆さもしいと判っているのに、腹ペこには勝てず、汚い言葉を浴びせ罵り合う地獄だ。黒パン分配を筆頭に食べ物を公平にするため『ハカリ』を作り、全員が見ている前で食べ物を分け合った。多い少ないと煩く騒ぐのは知的の高い人達でもあった。衣食住足りて礼節を知る。正にその通りと思った。

作業は2、30人でチームを組む。別の場所に積んである丸太を失敬し積み上げノルマ達成をさせたり。緯度の関係で冬の日3時を過ぎると日没だ、疲れ帰ると夕食と朝食のパンが1度に渡される。入浴、大の落とし紙、洗面歯磨きもなく、下着どころか衣服の着替えもなく、今日が何月幾日で今が何時何分かも判らぬ奴隷以下の人間の尊厳を完全に剥奪された環境に放置されているのだ。夕食と朝食を一度に全部食べて寝てしまう。残しておく盗られるのだ。夜の明けぬのに起され空腹の足を引摺る体にダバイ。タバイ。

伐採に入る前に白樺の幹の最下部に鉋で切り傷を付け、滴る樹液を米国缶詰の空缶に集めビタミン不足の足しにもした。松葉を煮込んで飲みもした。ソ連の軍医は女性だ。時々身体検査で健康状態を調べ就業の資料に提供するのだ。女性の前に全裸で立のはセクハラなのか後ろ向きに立たせる「屁」でもヒッて軍医を吹き飛ばしたいが栄養失調で「屁」をヒル元気もない。軍医は聴診器も持たず使わず、親指と人差指で臀部の肉を詰まみ肉の厚みで上・中・下のランクに振り分け、屠殺場へ送る家畜同様に扱う。作業種類の基準に提供し「上」を増やすのが名医だ。「下」の下はオーカと言って入院だ。軍医のノルマは就業者の確保なので、犠牲者は「下」ランクに集中し入院させられず就業中の事故死は「下」に集中していた。

酷寒で伝染病も発生しなと思うていたら、暖かくなってきたと感したら吹き出るように伝染病が発生した。主力は風が媒介する発疹チフス。着替えも出来ない着た切りスズメが血便を垂れ流し、糞にまみれで死んでいく地獄だ。日本ではご家族の人達が「陰膳」で祈っているのに、ここは「陰膳」も届かぬ地獄だと思った。毎日死者が積まれ死体の山が出来た。誰もが皆、故国に日本の親兄弟、妻、子どもに会いたい。どのようなことがあるうが「会いたい」一心で強い精神力をつくりだしてみせると、気力を持っていたのに。死ぬと通夜も告別もさせず丸裸にしてから積み上げるのだ。私は「白樺の樹液」「松葉エキス」で死線を乗り越えて見せると頑張った。

皆より少し元気？らしい何人かが、収容所食料庫の整理をさせられた。庫に入ったら白菜の山だ。みな一言も発せず、黙々と白菜を剥いて食べる。寒冷地のため糖分が多く最高の美味だと思うほどだった。飢えたウサギ以上の速さで、腹一杯になってから誰が言うともなく、ポッポッヤルカに大笑い。美味しいものを腹一杯食べるとうかい？貯蔵庫の馬鈴薯は収穫時と同じ凍っていない、馬糞に積み収容所へ運ぶ、この時間に冷凍されるのだ。卵は落としても割れない、少しひびが入るだけカチカチに凍っているから。

収容所付近には点々と家があり、シベリアへ送られた流人の監視員か指導員の住宅らしかった。この住人達揃って人情があり、疲れた重い足取りの私達に笑顔で、カルトーチカ（馬鈴薯）やキャベツ（カプースカ）を投げてくれた。私達は「善意の捨て野菜」と感謝して頂戴した。それにしても想像して下さい、足元に投げられた食

べ物を喜んで食べる人が、皆さんのお父さんであり、夫であり、我が子であり、弟、兄であつたら。と。だから戦争に反対しているのです。

当然收容所には收容所長がいる。ソ連全土の收容所長のノルマ達成の貢献補佐役が捕虜だから驚きだ。満州にはロシアの赤色化・共產主義国家を嫌い逃れてきたロシア人が大勢店舗を構え生計をたてていた。このロシア人相手に商売をしていた日本人も多く捕虜の中にも何人かいて、通訳として所長を補佐しているのだ。ソ連は8月9日に参戦し15日、日本の降伏僅か1週間で戦勝国になり、ソ連の戦後復興を口実に70、80万人の日本人を拉致し強制労働をさせただけでなく、鉄道建設、森林伐採等シベリアの開発を強要させた。その仲介役にロシア語の出来る捕虜が重要な役割を担っていた。捕虜より少しよい待遇に釣られ捕虜を苦しめ泣かせた側にいた。だから今も奴らに「時効」はないと探している人もいる。

抑留中3カ所收容所を変えられた。その都度友人と別れ、新しい友人に出会えた。その中で記憶にあるのは不思議と同郷の人達だ。Aさんは曹長だったと思うが鳴海の人。私が大府と言うと驚き急激に親しくなる。Bさんは瀬戸の人、上等兵で警察官だと言っていた。口癖は「自分自身が自分を守る」と要領のよい人。Cさんは体調の悪い年配者で名古屋で役人とか。おとなしい軍曹は桑名の人。鈴鹿の山や東山動物園、大須の映画館等、共通の場所が話題を提供してくれ、一緒にダモイ（帰国）の火を燃やし合い、励まし合った。

「働かざるもの食うべからず」の共產主義国家です。一冬を耐えやと太陽が暖かさをと同時に伝染病が蔓延しました。最初の頃は大丈夫だったのに突然私は口腔内が腫脹発赤し、骨膜炎を発症して、働けない必要のないランクに入れられた数十名と、外の見えない幌付トラックに乗せられ休養所らしい場所へ、医者はいても診察も投薬も無いのが通常なので、ひたすら苦痛と我慢比べです。平屋の倉庫が休養所に使われ、栄養失調で衰弱した捕虜が一杯で、何一つ語るでなく、一日中静かに寝ているだけでした。何処でどのような強制労働も話せないほど衰弱し、順番に死んでいく中で私は幾日か我慢する内に「陰膳」のお陰か何の処置もしないのに治癒し、ありがたく感謝しました。

ある日突然、病人の中で自分一人で歩けるも者だけ集まれます。

並ぶとジャポン・ダモイだと噂が伝わってきました。何と嬉しかったです。何か、身も心も引き締まり、体の中からぐんぐん力が湧いてきました。トラックから汽車にと乗り継ぎ長い日数をかけて下車し、更に数十日待機させられる内、ああ又騙されたかと不安になってきました。各方面から集められた病人捕虜はウラジオ軍港です。日本の貨物船らしいのに乗船したのに、迎えに来た日本の役人も、日本の船員も乗っていないのです。便所の近くまで乗せ病人で万船にして出航。着いた港は北朝鮮の興南で、ソ連は知らない病人を他の国へ押し付けたのです。私達は又しても騙されたのです。

持ち物は飯盒に毛の抜け落ちた荒い毛布1枚。栄養失調の身にはこの毛布が重くて歩くのにも息絶え絶え。やっと下船したらだらと集りだらだら歩き、あたりが暗くなってきたので小川の流れている野原で小休止。皆川の水を飲んだり、顔や体を拭いて一息入れる。少しして赤煉瓦の建物に收容され、付近一帯は家もなく荒野でした。日本に帰るとき再びこの道を通りましたら、この川は赤煉瓦收容所の下水排水路で、身震いするほど驚きました。

この興南收容所でも外に出ることはなく、收容人員不明ですが大勢の捕虜が、誰一人談笑する元氣もなく横臥の状態で、死を待つ人達の集りとも思えるほどです。死者が出ると頼りないが歩ける私達4人で死者を毛布で包み、戸板に乗せ裏山へ運び合掌して置いてくるのです。何処の誰か名前も判らず死ぬ人の多さに誰も驚きません。診察も投薬もなく、末期の水を飲ませる人も、誰にも見取られず死んでいくのです。満州で敗戦だったがために、ソ連の戦後復興に身をもぎ取られた人の死です。私達はこの興南收容所は日本兵送還最後の選別所だと認識していました。

興南港から今度は騙されず佐世保に上陸。アメリカ兵がDDT（強力殺虫粉）を頭から浴びせる乱暴な扱い。消毒・身体検査・諸手続後。私も入院拒否し一路故郷へ向かい復員列車に乗り込む。

日本の各港に引揚げ者が上陸したが、引揚げの史実を残す「引揚げ棧橋」が舞鶴に復元されたので訪ね判ったことは《こたまする引揚げ船の海鳴りに 天地も裂けよ 今君帰る》と詠んだ女性を軸に舞鶴の女性達が生還者を迎えたこと。女性達は誰よりも早く「遺骨」に涙し「生還者」に、よく生きて。と、喜びと労いの言葉で。私達は迎も無い静寂の中を喜びと安堵感で、夢に見た祖国の土を踏み締めました。シベリアで倒れた戦友の分も。と。



全裸へ粉雪をかけるだけ

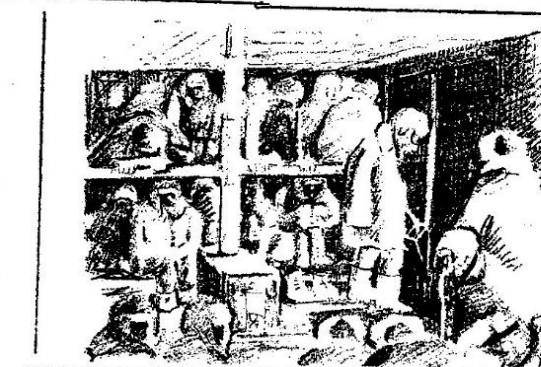
●印＝日本人捕虜収容所
白線は鉄道線路を示す



身体検査
全員働ける
上・中・下



42°



2段なので
蚕棚とよんでいた



シベリアいろはかるたより
伐採は冥土への一里塚

1994(平6)年5月27日
舞鶴引揚げ棧橋復原式で奇跡

橋詰 四郎

① 歓呼の声や旗の波

後は頼むとあの声よ

これが最後の戦地の便り

今日も遠くで喇叭の音

② 思えばあの日は雨だった

坊やは背名なですやすやと

旗を枕に眠ってたが

頬に涙が光ってた

③ ご無事のお帰り待ちますと

言えば貴方は雄々しくも

今度会うのは来年4月

靖国神社の花の下

④ 東洋平和のためならば

何んで泣きましよ国のため

散った貴方の形見の坊や

きつと立派に育てます

昭和19年、1歳の美智子は23歳の母親の背中におんぶされ、28歳の父親を天皇の命令で戦地へ送ったが、父の記憶など1歳の美智子にはあるはずもなかった。

夫の帰りを待つ母に、厚生省から山本治は、シベリア生還者の証言として昭和21年1月15日、別の証言者は2月12日、更にもう1人の証言者は2月14日、シベリアで死亡していると知らされ、遺族が死亡日を決めるよう言われ、真中の日を死亡日と決めた。

美智子の母は、昭和57年、61歳で、23歳で別れた夫の元へ旅立った。母の骨を墓に納めた美智子は、この墓には父の骨は入っていない。死んでも一緒になれない戦争を憎むと共に、戦争を呪い、戦争に巻き込まれた母があまりにも哀れ不惑と共に、見知らぬ父を恋う情念が一気に噴き出て、記憶にない見知らぬ父を探す決心をする。

美智子の父探しは、有名な温泉地の旅館組合へ「シベリア生還者の集り」りの情報提供を依頼し、知らせを受けると駆けつけ「私のお父さんを知りませんか」と。聞いて回っていた。この美智子の父探しは、私達シベリア生還者の耳にも入るようになった「シベリアで死んだ、見知らぬ父を探している娘がいる」と。

しかしこの思いを、マスコミは取り上げず、地獄のシベリア生還者だけにしか理解されない、日本は平和な国になっていた。

シベリア生還者は舞鶴市に、日本にただ一つ抑留の史実を残す引揚げ桟橋復原を、2千600万円集めお願いし、平成6年5月27日、桟橋復原式は行なわれた。

私達は前もって美智子に、父の名前を大きく書いた幟を持ち桟橋に立ち、写真も大きく伸ばしたのを準備するよう勧め、美智子はそれに従い、私はビデオ・カメラで記録係を担当していた。

乗船希望者が多いので、抽選で選ばれた60人が遊覧船をハシケに見立て、船からの上陸で復原式は始まった。その中に静岡県松崎町の須田がいた。須田は上陸するなり、幟を持つ美智子に「俺は山本治をシベリア、アラチカ炭坑で埋めてきた。」と伝え、美智子が父探し用に大きく伸ばした写真を見せると、間違いないと証言した。この時の須田の年齢は僅か17歳、兵隊でなく、満蒙開拓青少年義勇軍の少年であった。

※ソ連は軍人だけでなく45歳までの男子と、国際法に抵触している18歳未満の子ども迄も含め、70〜80万人の日本人を拉致、ソ連の戦後復興だけでなく、シベリア開発にも強制労働をさせた。私は怒りをもって『男狩り』と称している。

私達は、2カ月後の7月、永久凍土に眠るシベリア鎮魂墓参があるので、須田に埋葬場所と山本が身に付けていたもの書かせ、骨を持ち帰るように墓参者の望月に頼む。望月はアラチカ炭坑2年、ライチハ炭坑に2年いて昭和25年生還した。私と同じ8月21日迄、強力なソ連戦車軍団と死闘を展開した関東軍第6国境守備隊の猛者であった。

7月29日、望月は、地図で埋葬場所を見つけ、掘ると、須田の証言通り「祈る武運長久・山本治君」の千人針を巻いた遺体があり、一目で山本だと判かり、須田の記憶力の凄さに驚くも、17歳の少年には、あまりにも残酷で生涯忘れることのできぬ、地獄体験だったと思い直す。

8月、お盆前、美智子は父の骨を納骨することにした。骨壺を抱き「お母さん、お父さんをやっと探して連れて来たよ」と、慟哭する。私達は骨を渡した喜びよりも、悲しみが先立ち、泣き崩れる美智子を残し、互いに目配せして無言で墓前から去った。



皇中御見舞申上げます
 本日は私軍を立派な
 活字にして頂き亡父母
 も喜んでおられる事と
 思います。戦争終戦
 引揚と日本が歩んできた
 ました。道程を忘れてはなりません
 八月十五日午後九時からNHKスベールに橋の
 の紹介と父の軍軍郵便お父への思いを綴った
 手紙放映されるか解ります。見
 じみ

「岸壁の母」橋も涙も再現

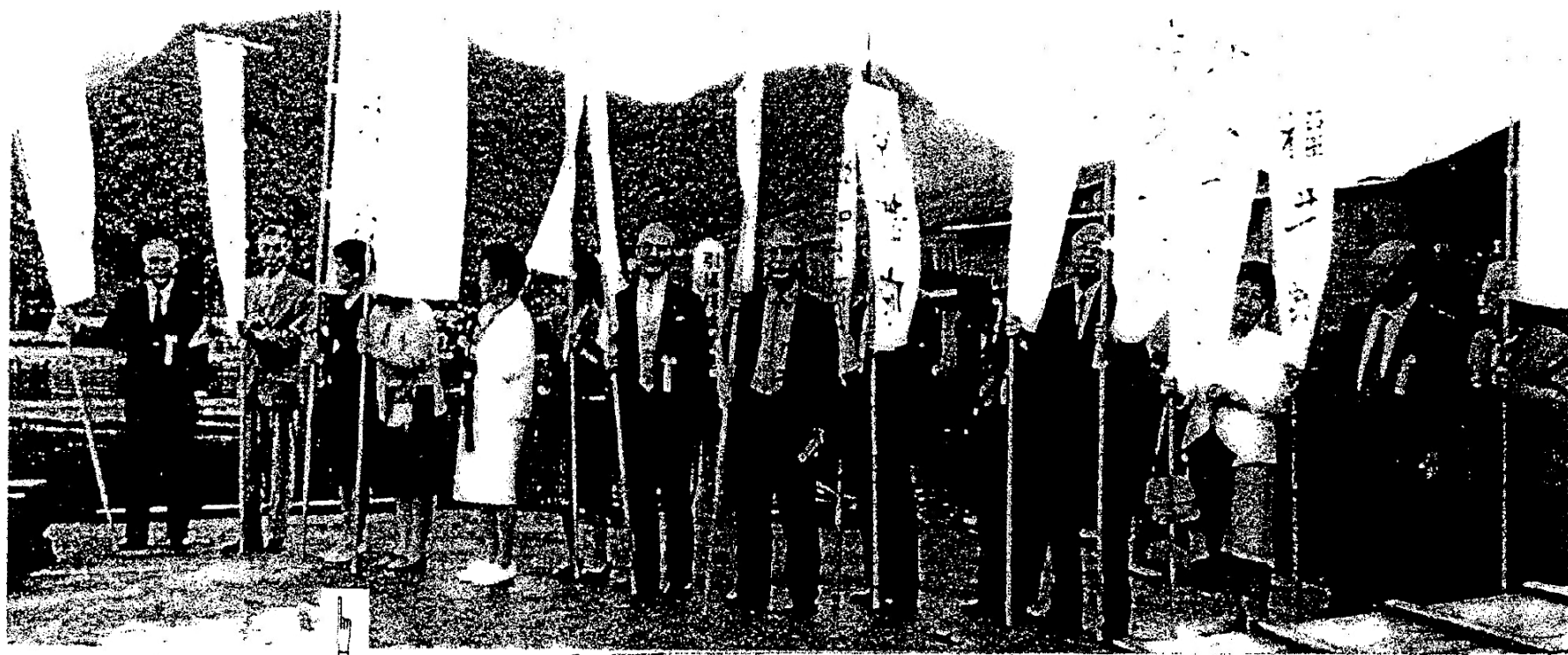
舞鶴港

戦後、大陸などからの帰国者約六十六万人が第一歩を記し、歌謡曲「岸壁の母」の舞台にもなった「引き揚げ橋」が、京都府・舞鶴港に復元され、二十七日、完成式があった。「橋は歴史の語り部。世界平和の懸け橋として未来永劫(こころ)に史実を継承する」とのアピールを採択し、引き揚げ風景を再現した。

復元橋は木製で長さ十五メートル、幅四メートル。かつての橋跡にできた。「引揚を記念する舞鶴全国友の会」(事務局・舞鶴市)が、引き揚げ体験者から寄付金二千五百万円を集め実現させた。

式の後、体験者九十人を乗せた汽船が橋に接岸した。エプロン姿の女性や名前入りののぼりを持った人たちが出迎える中、当時の軍服や軍帽姿の人たちが橋に降りた。最後の引き揚げから三十六年ぶりのシーンの再現に、目頭を押さえる人もあった。

復元された橋をわたる引き揚げ体験者ら。27日午後、京都府・舞鶴港で



3人目 山本美智子

増田重機関銃手

『棄民』のあしあと

夏梅 誠一

戦争が終わり世界が日本が平和になってから、満州の日本軍、一般邦人併せ180万人は戦勝国ソ連の管理下に置かれ棄民扱いに。関東軍軍人軍属64万人と、45歳迄の邦人男子を「男狩り」70万、80万人をソ連に拉致。私は、黒河の対岸ブラゴエシチュンスクで、満州から略奪した物資満載貨物船から荷下ろしを、酷寒、飢餓、疫病に侵されての重労働。歯磨き、入浴、トイレパーも無く人間の尊厳も剥奪され、遂に感染発病。医者診察投薬もなく、病人は不用と日本へ帰さず、対岸の黒河へ逆送「東北人民軍」の管理下に移され、黒竜江の解氷音で今日は昭和21年2月下旬と知る。黒河数カ所の収容所はソ連から捨てられた病人で満杯。収容所もソ連同様医者、薬もなく流通通貨最高位の「円」で、中国人から栄養食を買い食べて、虱を潰しながら静養し回復に務めた。

東北人民軍は、ソ連から際限なく送り込んでくる日本人病人を受け入れるため、少し暖かくなった4月、350里南の北安（ペーア）へ移すことにする。移動は「徒歩」ソ連は満州から引き上げる時、北安から順に黒河までの鉄道線路を捕虜に剥がさせ、ソ連に略奪したのだ。歩けない病人は馬車、歩ける者は4人1組。4人毎に粟・塩・マッチを支給され、自炊と野宿で2週間で歩きの計算。橋詰達の調査によると1回2千人前後で6月までに6回行なわれ、毎回1/2、1/3の行路死がたと報告している。

私は、上官風を吹かせないS・村中で満州に開拓村開村に来たF・ソ連軍と交戦なく全員元気で拉致され、氷点下40度以下の森林伐採の強制労働。僅か3カ月で半数死亡、半数病人の生き残りKとでチームを組む。互いに労り合いつつ2週間で半行程。支給食料食尽くし「円高」で買い食いしつつ4人揃って北安着は私達だけと絶賛される。

北安の収容所長は私達のチーム力を認めたのか、4人で北安軍政学校の炊事をと。建物は日本の全寮制旧制中学校だ。日本文字がそのまま残されており6畳の和室を使えと言う。4人とも場所と環境は違うがシベリアで死を覚悟し「畳の上で死」を願望したのに今大の字で畳に寝転んでいる。荷物は、飯盒と箸に毛の抜け落ちた毛布1枚だ。監視兵もなく、自分の体に合った食べ物を作り、それぞれが回復に勤め、若い生徒達は年配の私達に礼儀正しく接し、少し人

間界に戻った気分。南満州ではソ連軍が食べれるものは、家畜の餌まで略奪したので、食べ物がなく餓死者が出ていると聞く。

4人に体力が少し戻ったと思った頃收容所長が、君達より体力のない者と代わってほしいと相談に来た。今迄の一方的命令でないのに私達は驚き感謝して承知。行き先は東山（トンサン）の「炭坑」だ。黒河から移されてくる捕虜で北安は捕虜で溢れ、少し元気な捕虜達が貨車でなく客車移動に再度興奮し東山に着いた。※前号迄※

中国側は10名に1人組長を選び、組長10名から寮長1人決めよと。Kが組長を引受け、組長の選んだ寮長は年配のAさん。昨夜、日本側の寮長6名と中国側3名の代表が話し合い、今日から始める作業について、中国側の提案も受け入れ双方が了解した。と述べる「これから君達の生活に必要な炊事場、井戸、便所、風呂場など生活場建設と、各寮の暖房設備などを1週間ほどで完成してもらいたい。君達の中の大工、左官、板金など技術者には必要な工具、器材、煉瓦、セメント等の材料は坑山側が揃える。各技術者に他の者は協力して君達の生活場所だから全員の力でやり遂げてほしい。昨日までブツブツ言っていた奴も「そういう話ならやるしかない」と、重い腰を上げた。

翌朝、大工、左官、板金の親方を先頭に材料受領に行き、一輪車にツルハシ、スコップ、大工道具、ブリキ板等を持ち帰り作業が始まった。炊事の竈造りは煉瓦運びから、腹の前に組んだ手の上に煉瓦6コを乗せ炊事場になる場所へ。ツルハシとスコップで井戸掘りも始まり、大工が積み上げた材料から井戸枠やツルベを。集落の中国人から15台ほど馬車を借り、北安から運んだ炊事道具を駅まで取りに。左官が馴れた手付きで竈の焚き口を造り煉瓦を積み、中国特有の「平鍋」を据え付けると、いっぺんに炊事場らしくなる。

圧巻は「板金」だった。板金親方が、これから造る品物のイメージを頭に描きブリキ板を鉄ハサミで切り出し、レールの切れ端にブリキ板を置き金鋸で叩くと、板が円筒に変化し煙突になるのだ。円筒の片端を膨らませるように叩き出すと接続力所になる。何人かの中国人親子がしゃがみこみ半円形に囲み驚きの声をあげ見学。親方はブリキ板に大きな「扇」の絵を書き鉄ハサミで切り出し「バケツ」を造り出した。両面から接続させる襦の叩き出しは細心の技術が伝わってくるので、見物人も静かに見守っている。叩き台のレールを立てたり斜めにしたりしてバケツの「底」も叩き接続させ、子ども

もに水を持ってこいと頼んだ。親方は見物の中国人にバケツを高く掲げさせ、別の中国人に水を入れさせ、子どもに「底」を見させ「水」が漏れたら「フォワイラー」駄目」と言えと。一滴も漏れないのに驚く、中国人も捕虜も驚異の声を上げ拍手で親方を絶賛した。

寝起きするアンペラ小屋にはそぐわない立派な炊事場は、土でなく煉瓦造りだ。ピカピカの煙突が立った。隣の風呂場は鉄板を溶接し大きく1度に15、6人入れる浴槽が備え付けられ、洗い場も広く造られている。無人のアンペラ小屋には舞台が出来、3人掛け腰掛が並べられ小劇場になった。特に炊事場は私達4人が働いた日本が設計した、全寮制中学の炊事場をモデルに、更に日本人向けに使いやすいようアドバイスして造ってもらい、使うことの出来ない見物の中国人からは「ため息」が出るほど絶賛され、この素晴らしい技術を持った日本人をソ連は使いこなせない愚か者と、悪態を言う奴も出るほどだった。

建設作業を始めて6日目、始めての炊事場で料理された食べ物が並べられた。脱穀し柔らかくした高粱飯に、白菜と豚肉の油炒めに塩の利いた漬物。私達は「軍政学校以来のご馳走だ。よく働いたご褒美やろか」と、いつになく賑やかに食事をした。

翌朝全員集合。日本側の寮長達と中国側の所長、見慣れない中国人幹部がいた。A寮長が開会を告げ所長に発言を求めた。所長は開口一番私達の働きを絶賛した「私は皆さんの仕事を見てきた。皆さんはここに着いたばかりなのに炊事場、風呂場、井戸掘り、便所など、どれを見ても十分な満足な材料でないのにどれも皆素晴らしい出来映えだ」と、持ち上げ、炭坑は初体験者が多いので、坑区の次長に説明させる。が、その前に私は「諸君の労働条件、賃金も中国人と対等を条件に、次長に説明を求めると。」

次長も、中国人労働者と同一条件と切り出し「この炭坑の炭質は軽量で無煙、火力が強く需要が多く生産がおっつかない。皆さんの働きに期待している。作業は「掘進」「採炭」が主力。1日8時間労働。どの現場も「朝番」「昼番」「夜番」の3交代制「夜番」の次が休日。各番は4人1組。番号番号札を受取り作業開始。出炭台数と賃金計算は、各トロッコ毎に差し込んだ番号札の1カ月枚数合計を1台出炭単価に掛け、その4当分が各人の賃金額になる。他に坑木を坑内へ運ぶ仕事は落盤防止の大工作業の補佐雑務であり、8時間労働の固定給。どの仕事を選ぶかまとめて、各寮長に提出し、

速やかに坑山事務所へ報告してもらいたい」と。

話が終わっても私達は誰1人立ち去ろうとせず、各人がいぶかっている疑問をぶつけ合った。それは「ここで働く中国人と同一条件」であった。私達はこの東山（トンサン）へきてから、監視兵も鉄条網で囲まれることもない自由人扱いだが、それは私達の明日からの生活に「解放」されたのかと思うほどの希望を与えた。もし、そうであるなら、炭坑側（人民政府側）はどうして私達を捕虜から解放帰国させないのか、北安以来抱き続けてきた疑問を今になって中国側から見た時、その理由が見えてくるように思えた。

ソ連から役立たない病人捕虜を引き受けた「東北人民政府」は、中国東北地方（旧満州）の一部を占有する地方政府に過ぎず、松花江から南は国民党軍の支配下で、紙幣を発行してもその価値は国民党軍が優勢なら下落し、アメリカ製の武器弾薬で武装している国民党軍との戦闘は熾烈を極めているようだ。黙っていても紙幣価値の上下で人民にも一番早く判るのだ。

このような情勢下で私達を解放しても、国家としての形態すら整っていない現状と、米国政府統治下の日本との外交折衝や手続きなどは容易でないだろう。それらを考えると、私達の解放帰国は程遠いと思わざるをえなかった。それは、敗戦以来、シベリアで倒れた多くの戦友達の最期も、私達「いのち」ながらえられた捕虜が、2度目の越冬を伝える「文通」すら出来ない環境に晒されている現状から、もそれを物語っているのである。

黒河からの私達4人は太い「絆」で結ばれてしまった。3週間風雨に曝され、夜冷えの野宿を励まし合って、黒河の物売り中国人も病人が野宿で350人は歩けないよ。と、心配したほどだ。倒れた人の物を食べ物と交換して辿り着いた人もいるのだ。4人は賃金は安いが昼働き、夜寝る大作業雑役補佐を選んだ。今日は初日だ。4人で坑山事務所の出勤簿に拇印を捺した。キャップランプの帽子をかぶり、ピッケルのようなハンマーを持った中国人が私達4人へ「行くぞ」と声をかけ出発した。鶏や豚も飼っている炭坑労働者の住宅が並ぶ中を通り抜け、前方のぼた山へはワイヤーに繋がれたトロッコが上下している。

うづ高く積まれた丸太の前で私達を止め、私はこの地区を仕切る監督のAだ。仕事をしながら話を聞けと言い「この坑木を2人で担

ぎ、向こうのトロッコまで運べ」すかさずFが「俺が後ろを担ぐ」と私をかばってくれた。水分をたっぷり吸い込んだ白樺の丸太は物凄く重く、頼りない腰付きで一步踏み出した。朝露に濡れた丸太から雫が背中を伝い、軍隊シャツと夏服と冬服の重ね着という着た切りスズメには、その冷たさと重さが骨身にこたえた。

監督は「前はゆっくり丸太を下ろせ」と大声。私は腰を屈め丸太を下ろした。「後ろは丸太を抱え足をずらしながらトロッコまで進め」と大声。Fと私は渾身の力を絞り丸太をトロッコに入れ、分厚いゴムベルトで固定しトロッコに乗った。監督は「皆乗ったか返事しろ」と怒鳴る。皆「ハイ」と大声で返事をする。喧噪な職場なので大声でないと通じないし、気を緩めると大怪我なのだ。監督は握っていた連結棒でトロッコの横を強く叩き出発合図を出す。「頭をさげろ」監督の大声。薄暗い裸電球に照らされ狭い坑内へガガラと反射音を響かせ急降下し、坑内の平地で止まった。

監督は「ここが「掘進」の現場だ。冬寒くなると君等もこの暖かい現場を希望するから、この仕事を見ておくように」と言った。先端は2人の坑夫が左右に分かれ、1人ほどの高さの炭層にやや小さいツルハシを小振りにして炭層に溝を入れていた。監督は「あの溝を出来る限り深く掘り上から叩くと、効率よく石炭が取れる」と教えてくれた。2人の坑夫が同時に上を叩くドスンと大きな石炭の塊が落下し砕け大小に散らばった。スコップ役は5人ほど離れたトロッコへ何回かに分けて石炭を積んでいった。

監督は「炭層に岩盤が通っている時はハッパを仕掛ける。その時はまた説明する。私は他の現場へ行くから、君達はトロッコで上に戻り仕事を続けるように」と、行ってしまった。私達だけでトロッコに乗りFが監督が言ったように「皆乗ったか」と大声。大声で返事をする。Fが連結棒でトロッコの縁を「カーン」と一発叩く。驚く速さで巻き上げられ一気に眩しい地上へ出た。私達はさも大仕事をしたきたような気持ちになって、全員欲得なく柔らかな草原にひっくり返り深呼吸した。

坑木用の丸太運びも1カ月が過ぎた。私は相変わらず危なっかしい腰付きで、Fの力を借りトロッコに積み固定し、裸電球を頼りに急降下して現場へ担いでいく、一歩間違えば大怪我なのだ。毎日身も心もクタクタだった。そこへ秋のない2度目の冬が、捕虜に一気に待ったなしで襲いかかってきたが、それに耐える衣服を持たない

私達は、監督の「予言」通り坑内作業に身を置くしかなかった。

監督はリーベンクイズ日本鬼子の私達に、折に触れ親切丁寧に「掘進」「採炭」「ハツパの手順」等を大声で怒鳴るように説明し、「判ったら大声で返事」と、この日が来ても私達が困らぬようにしてくれていたのだ。明日から坑木運びの「雑役」からいよいよ「掘進」の現場へ入る前日、始めてソ連の軍票と東北人民券で賃金を受け取った。寮長は「賃金から当月分の食費、1カ月分の食料備蓄費、炊事等無賃金者の賃金、病人の食費などを差し引いてある」と、言った。私は差し引かれても思ったより多かったのでホッとした。

ついこの間迄、トロトロの粟粥を啜っていた私達全員、お金を持ったことで変化が現れ、食物売りの中国人も宿舎の回りを売声高いうろつき出したし、それぞれが自分の好きな食べ物を買って、晩飯のお菜にもしていた。それだけではなかった。中国人が着ている自家製の綿入れ服や、大手袋を持つ者が増えてきた。これ等は中国人坑夫の奥さんの手作りで、裁縫の上手下手で人氣が2分され、坑夫が宿舎に来て注文を取るようになり、後払いでもよろしいと私達は信用され、収入の少ない雑役組も越冬出来る衣服を着ることが出来た。

そんなある日、この炭坑へ出発する時乗車した北安駅の別ホームで、何処かへ送られる軍服を着て、顔に煤を塗り黒髪を切り男に変わった日本女性の一団がいた。その彼女達が南山（ナンサン）にいと伝わってきた。それを知った何人かが往復20里もある南山まで婚活に出かけた。ボタ山の向こうに夕日が沈む頃、喜色満面の3人が、緋の和服にモンペ姿の「お嫁さん」を伴って帰ってきた。娘達は汚れた軍服を脱ぎ、とっておきの着物を着て、棄民された同士が異国で苦勞を分かち合う伴侶を得たという、ささやかな安堵感と喜びが滲み出ていた。この無謀というか、非常識というかに、坑山側は快挙ともとれる扱いで、粹な計らい「新居」を提供した。

3組がそのその新居へ案内される新婚達の両側にみんなが詰め寄り「おめでとう」「うまくやれよ」などと声掛けして、頭や背中をポンと叩く奴もいたが「これからが大変だなァ」「そうかも」と言う声も聞こえた。私は自分1人でも日本へ帰れるかと心配しているのに、「手鍋下げても」のような彼らの生き方は、現役兵から捕虜への毎日が《青春》の今の私には到底理解できなかった。

坑内組は大小に關係なく1コ、石炭を持ち帰ることが出来、炊事、暖房に使われる。資格のない大工組は肩身の狭い気持ちだ。真つ黒な顔をして帰ってくるなり、石炭をストープ脇に下ろし「ただいま」とブッスと言うのもイッパシの坑夫面がうかがえる。そんな連中と始めて「掘進」の現場へ行く私達新米8人は、坑内事務所で拇印を押したあと器材庫でツルハシ、裸電球、ソケットの付いた電線等を取渡された。先輩が「先の丸いツルハシは砥石掛けに余分な時間を取られる」と、注意してくれた。10数台のトロッコに器材と一緒に分乗し急降下し現場に到着。私の組はFが先に立ち、坑木の先端に電線を張り裸電球で作業場を明るくし、2人1組でツルハシとスコップ組を適当に交代し作業をした。

監督が回ってきて、新米の作業を暫く見ていたが「まあその要領だ、2、3日すると岩盤が出てきてハッパが必要だろう。ハッパはその時教える」と、言っておへ回っていった。1位の深さに炭層を穿ぎ、教えられた通り上を叩くがポロポロとしか崩れてこない。石炭も新米は馬鹿にするのかと、思い切り叩いたらミシミシと音をたてて大きな塊が落ちてきた。スコップ組が大急ぎでトロッコの方へ放り出した。

ツルハシとスコップを持つのは去年の夏、孫呉陣地で戦車壕を掘った以来であった。スコップ組は溜まった石炭をトロッコに積み、空車と入れ替えなどで忙しかった。山盛りに積んだトロッコに番号札を立てた数台のトロッコを引っ張り上げるため、Fはいつにない張りのある大声で「上がるぞ」と一発連結棒でトロッコの縁を力強く叩く。こうして「掘進」第1目の私達新米は、大きな石炭を担ぎ「ただいま」と石炭ストープの脇に積み上げた。

3日目、監督の予言通りハッパになった。いつもの器材の他12ポンドのハンマーと六角の鉄棒（六角棒を握った途端不意に背筋を悪寒が走り、血が引き倒れそうになった。去年の今頃氷点下40度のブラゴエで満州から略奪した水分で凍りついた石炭を砕き落とした棒と同じだ）そして紙袋に入った12本のダイナマイトと導火線をもちながら私は複雑な思いだ。棄民された捕虜が結婚し、今私は爆薬を持たされ、運んでいるのだ。

石炭断層には灰白色の岩盤が7、80センチ幅で層をなし、層に沿って3カ所に六角棒で深さ1位の穴を穿ち穴1つにダイナマイト4本を装填し導火線と接続する。点火役の電球当番が「準備いいか」と

大声。私達3人は工具を持ち30分以上離れた避難所へ身を隠し「ヨーシ」と応えた。もう一度確認し電気当番は「点火」と叫ぶ。青白く線香花火のような火花を吹き出すのを確認して電気当番は私達3人の避難所へ駆け込む。緊張の数分後トントドンと2発。間を置いて3発。何故か私達4人は「成功」と頷き手を握り合った。ツーンと鼻をつく硝煙の臭いと喉にまでからまってくる炭塵の中で、4人は一生懸命に石炭をトロッコに積み上げていた。

朝5時にはツルハシを振るっている1番方から、夜寝る頃仕事に出かける3番方まで、3交代の日程が一巡する頃には私達は仕事のを要領が身に付いてきた。その頃、キャップランプを付け、ハンマーを持って監督面した中国人がウロツキ出した。彼等は監督Aの下で働く日本人に余計な口出しをし、偉そうに振舞い「お前等日本鬼子は俺等の働きに快々（早く早く）と鞭で叩いた。俺は鞭で叩かないがもっと早く仕事をしろ、なんだこのトロッコはもっと積み」と報復を始めた。農民Fを除き私達3人は「脛に傷」の身なのだ。

少しでも早く切り上げたい3番方でも、明け番が近づく（明日は休みで次は朝出の1番方か）と思うと足取りも軽くなる。仕事が終わる風呂場で手足を洗い食堂へ、炊事が運んできた食缶には「葱」「味噌の匂い」「甘そうに光る黒豆」目を丸くして驚く私達に「今日はな、日本の正月らしくと炊事が苦労したのや」と言った。「そうか今日は昭和22年の元旦か」「俺の故郷はすまし雑煮だ」とかそれぞれが日本の正月を語り出した。ここは旧正月を祝うので今日は日常と同じなのだ。それにしても去年はシベリアで正月も知らず、今年は炊事に教えてもらったのだ。

そのような正月早々、黒服（人民軍の制服）を着た新顔が坑山事務所に現れた。「彼は日本人だぞ」と噂された。彼は思いのほか早く私達の前に姿を見せた。私達が食事を終わった頃を見計かって、大きな風呂敷包みを背負い現れ「これ回覧本です、読んでください」寮長は「これはこれは」とお礼を言いかけたが、「別の寮にも配るので」と出ていった。皆活字に日本の文字に飢えていたので歓声を挙げて喜んだ。横光利一・久保田万太郎・井伏鱒二・芥川龍之介などの本の間に、薄茶色に変色した昭和初年頃発行の「改造」「中央公論」が数冊重なっていた。私はその1冊を取り頁を開くと、目次の巻末に「蟹工船 小林多喜二」の文字が目についた。

急いで頁を繰ると、文章のいたるところが×××の伏せ字と（○

○行削除」で私は愕然と驚き「やはり本当だったんだ」と呟いた。

軍隊に入る前学友の兄がこの種の本を回し読みしていると聞いたが、本物を見るのは初めてだった。好奇心も手伝ってこの本を借り読むことにした。文意は「削除」と「伏せ字」で原文をとどめないままに歪められているのだ。それにしても、あの時代、特高警察や憲兵の厳しい弾圧下にも屈せず、書いた人と出版した本屋がいたのだ。

そして、私達の年代に入ると「伏せ字」「削除」に覆われた本ですら見ることも発刊されることも出来ないほどの『言論統制』へと突き進んでいったのだと思った。しかし私は×××抹消や○〇行削除の前後に連なる文脈の流れを如何とも推測できなかった。それでもあの時代、この種の本を回し読みした人達は、紙背に達する眼光を以てそれらの紙面を守っていたのかと思った。そして今、アンペラ小屋でこれを読む自分の置かれている立場と状況を考えた。

回覧本を配った黒服の日本人と私達の顔合せは各寮ごとに始まった。寮長を中心に私達30数人が集まり寮長が彼を紹介した「私達と坑山側や地方政府との折衝役として赴任したHさん」と紹介し、続いてH氏は自己紹介の後「私は皆さんと坑山側との掛け橋になれるように働きます」と頭を下げ、今東北（旧満州）の各地域では工場、坑山、事務所、学校、農場などで「学習運動」が一斉に始まっている。この東山（トンサン）でも、中国工人、職員達も学習運動の準備を進めており、私達日本人も彼等から「この運動に参加しないか」と誘われた。それを受けて、日本人としてどのように学習するか、その試案をつくり地方政府の指導を受け原案をまとめた。それを今から皆さんに聞いてもらいたい。そして意見要望などを聞かせてほしい」と前置きし、次のように話した。

ここ東山で働く日本人300数十人の内、大半は国境守備隊としてソ連軍と闘い、敗戦後捕虜として強制労働と伝染病で多くの仲間と死別を繰り返した者達と、王道楽土建設の国策に従い開拓農民として渡満した人達である。両者共「聖戦遂行」の下に強引な国家方針の犠牲者と言えよう。あの「大東亜共栄圏の建設」という大号令にどれほど私心をはさむ余地があっただろうか。己の主張などありようもなかった。今日日本では戦争の責任を曖昧にするような「一億総懺悔」などという風潮にあると聞くが、果たしてそれでいいのだろうか。私達は自身の体験を通してそれに対する「考え方」を確立

しなければならぬだろう。「それがこれからやろうとする学習の原点だ」と熱意で訴えた。

質問を促された私達は。まだ「言挙ⅡコトアゲⅡせぬ民」から這い出そうとせずHの話が終わるといつものように何人かで頭を寄せ合い「なんか少しは判ったようなきも：」「要は自分の頭で考えろか：」などと喋りあった。その数日後、もう一人黒服の日本人が現れた。鍛えられた風貌で52〜3歳か、私達はこの人を「Mさん」と、さん付けに呼ぶようになった。

Mさんはここへ来た翌日から私達1人1人と個人面接を始めた。みな尋問でも受けるように鬱陶しがったが、面接を済ました人によると、健康状態や仕事について不満や要望、日本の家族などへの心遣いや私の不安心。特技の有無等を聞かれたらしく、私達のことを考えている人だと、感想を話してくれたのでホッとしたという雰囲気になった。

私の番になった。室内に入るとMさんは椅子を立ち「疲れているのに申し訳ない」と謝り、私にも椅子をすすめてくれた。軍隊と捕虜生活で4年以上を過ごした私は久々の「人間扱い」に少し戸惑いを感じた。Mさんは瘦せている私の体格を最初に気遣ってくれ「身体調子はどうですか」と問われ、私は「まあ何とかやっています」と応えた。「なにかやれるようなことはありませんか」と尋ねられ「デッサンと水彩を少し習いました」と答えたが、その時はこんな他合いもない会話が役に立つなどとは、微塵も思っていなかった。

HとKさんが来てから私達が寝食するアンペラ小屋にも、少し変化が見え始めた。先ず顔を合わしても滅多に口を利かなかった1番方と3番方の連中が、回覧本を通してお喋りをするようになった。それから、Hが軍隊時代の慰問袋に入っていた紙の将棋と将棋盤などを差し入れてくれたので、皆飛び付き、勝敗戦に発展し順位付けを始めるほどだ。

その頃手先の器用な元下士官が、櫓の四隅黒枠で見事な麻雀牌を作り、それから元下士官と古参の召集兵達が、夜勤明けで寝ている人達の迷惑も考えず、連日ガラガラチャイボンと掻きまぜるようになり、それどころか彼等は回覧本のページをちぎり紙巻き煙草で灰と煙に。そんな図々しさに皆何も言えなかった。戦争に負けたのに『上官の命令は朕の命令と同じ』の階級が死なずに生きていた。

親より先に死なせては
いけない
親より先に
死んでもいけない

この小冊子が
戦争の愚かさを伝える底力に
なればと折り編集作成した

願望は全ての核をなくし
宇宙飛行士が絶賛する
水と緑の美しい星を
子ども達へ引き継ぎたい

先ず 人種・宗教間の
争いをなくしたい

♡みなさまに平和♡と
愛をこめて折りつつ

戦時体験記録集(第21集)

編集・印刷・発行

発行年月日

発行部数

戦争体験を語り継ぐ会

平成26年7月26日

150部